

犬種の違いや散歩の有無が飼育者の健康状態に及ぼす影響に関する研究

1230520 弘田葉澄

指導教員 前田和範

研究背景

人生 100 年時代と呼ばれる現代において「健康」は欠かせないキーワードであり、ウォーキングはその代表的な存在になっている。近年では、スポーツ庁が犬の散歩をスポーツとみなしていることから、運動習慣として継続しやすいウォーキングや犬の散歩は、生涯スポーツとして今後さらに必要な役割を果たすと言える。本研究では、犬の飼育および散歩が飼育者の健康状態にどのように影響するかを探った。

研究目的

先行研究では犬が飼育者の健康状態やライフスタイルに影響を与えていることが示されているが、そうした影響が犬種の違いによって変わるのか定かではなかった。そこで、本研究では、「ヒトの健康習慣に与える影響について、犬種による違いを認知する観点からその有効性と意義を明らかにする」ことを研究の目的として調査を進めることとした。

調査・分析方法

オンラインアンケートにより、本研究の調査対象である犬の飼育者かつ日常的に強度な運動をしていない者 (n=185) を絞り込み、本調査を実施した。調査項目は、「個人的属性」「犬種」などのほか、「主観的健康感」「生活満足度」「犬を飼ったことによる効果」をそれぞれ 5 段階で評価してもらい、犬種ごとの比較や散歩の有無による健康状態や効果の比較を行った。

分析結果

犬種ごとで比較した結果、「生活満足度」(小型犬<大型犬)と、「犬を飼ったことによる効果」のうち「体力アップや日常的な運動の継続に繋がった」(中型犬<小型犬・大型犬)の 2 項目において若干の有意差が認められた。また、散歩の有無による比較では、「犬を飼ったことによる効果」4 項目で有意差が認められ、散歩をしている人の方が、犬の飼育の効果が高いこと明らかになった。

考察・結論

本研究の結果から、運動習慣として継続しやすい犬の散歩が、スポーツ実施率の向上にも貢献するほか、地域の人々とのつながりなどを形成することが示唆された。また、犬種の違いによる研究結果も得られたことから、今後は、自らの運動習慣に合わせた犬種を選択できるようになることで、アフターコロナにおけるペット離れや共生社会の実現にも研究の意義を見出していくことができると考えられる。